

今月の本

藤原 悟 (第6回)

私の担当の最終回は、外国のサイエンスフィクションの紹介です。以前にも書きましたが、フィクションの面白さは、豊富な資料・データ・情報と専門的知識に裏打ちされた高い蓋然性、つまりその正確な描写により読者をして、ついあり得ることだと思わしむるところにあると思っています。もちろん、まったく逆にあまりに荒唐無稽なものもまたよいのかも知れませんが。私はやはり、前者が好きです。それが今回紹介するジェームズ・P・ホーガンとバリントン・J・ベイリーの作品です。

ホーガンの代表作は、「星を継ぐもの」(創元SF文庫)と2作目の「ガニメデの優しい巨人」そして完結作の「巨人たちの星」です。紙面の関係で、「星を継ぐもの」を紹介します。月で発見され宇宙服をまとった死体は、今の地球よりもはるかに進んだ文明の生物体で、しかも死後5万年が経過しており、細部まで形態的には地球人とまったく相違がありませんでした。5万年前の地球人類にはまだこのような進んだ文明はなかったはず。ひとびとは、死体の持ち物を分析し、彼等の言語の解読に躍起になりますが、この謎を主人公の原子物理学者がひらめきによって解決します。「太古は、地球には月が無かった。ミネルヴァという地球以上の生物が住める太陽系の惑星のひとつがあり、それが月をもち、そこで人類が誕生した。何かの理由(核戦争など)でミネルヴァに爆発の危機が迫り、一部の人類が月に避難した。そのミネルヴァの爆発のエネルギーで月は今の地球の近くの位置まで移動し、月に残った人類が新天地を求め、かつ環境の類似する地球に移り住み、現在の人類の紀元となった。この説により、現在私達が疑問としている、人類の祖先とされるネアンデルタール人と現代人の不連続性が説明される。つまり、ネアンデルタール人はもともと地球で発生したが、その文明の遅れゆえに、月からの人類に駆逐されたのだ。ミネルヴァの爆風をうけた月面には、無数の岩石の嵐が襲い、その面が今の月の裏側であり、地球に面した表側との性状の大きな違いも説明がつく。」という太陽系を舞台にした壮大なフィクションです。

ベイリーの代表作品は、「時間衝突」(創元SF文庫)で、異星人の襲撃で文明の遺産がことごとく失われたはるか未来の地球が舞台です。異星人の残した遺跡の調査で、300年前に撮影された写真に、現在のものよりもはるかに古びた遺跡が写っていたのです。遺跡が新しくなっているのでしょうか？

これは相対性理論なども関係するすこし難解な小説ですが、要すれば「時間という概念は今現在を意識し生きている私達のものであり、時間の方向というのはその中に生きる生物によって意識されるものである。従って、私達は進んできた時間の方向を”勝手に”「過去」と規定し、これから進むであろう方向を「未来」と認識しているに過ぎない。だから、私達とまったく異なる方向の時間流をもつ生物が存在しても不思議ではない。さらに、私達と正反対のまたは私達と交差する時間流の生物もまた存在しうるわけで、そのため、“時間の衝突”が起こりうるのだ。主人公は、タイムマシンに乗り、300年前の過去へ赴くと、そこには自分たちの発掘した徴候を残す遺跡がさらに崩れ、廃虚となって存在していました。そこで、さらに確認すべく400年未来にさかのぼると、その遺跡は異星人が繁栄を謳歌する傷ひとつない真新しい集落として存在していたのです。ただ自分たちの時間感覚で動くタイムマシンから覗いたその世界は、後ろ向きに歩くなど景色全体が逆回しにしたフィルムを見ているようでありました。つまり、彼等は異星人でもなんでもなく、地球人そのものであり、我々の何百万年も未来から進化してきており、同様に我々も彼等にとっての未来にいるわけです。地球には、まったく別のふたつの進化した種があり、それぞれの時の流れの中で隔てられ、別の時間流-正反対の向きに進む時間流-に乗っていて、しかもそのふたつの時間流は、衝突針路にあったのです。この二つの種は互いの存在に気付き、衝突を期に相手を壊滅すべく、準備を始めました。このような考えに基づくと、もしほぼ平行する時間流の種であっても、互いの現在瞬間に同調がなければ、互いの存在すら意識しないことになります。もしかすると、こうしている今現在でも、私達の周りにも私達の時間流では意識できない他の時間流で動く異種が存在し、彼等のタイムマシンで私達の時間流に同調し、密かにあなたの私生活を覗いているかも知れません。

(半年担当いたしました。このような機会を与えて下さった編集同人の先生方、メディカ出版の方々に感謝申し上げます)